二五三

十訓抄

下

十訓鈔巻下本

第八可堪悪諸事

或人ありけりとぞ申しける。ある
ものとなりて人に仕へけるの過る
ぜ堪ぬ事を三のことをぞ申しける
人乃成よりて捨てけりとぞ申しける
其ちゝ母にもこうとぞ申しける
らんをこのひとく道をまなび学を三の
ゝ忘れにくて家をおこし分を立てかり
ゝとくきなしはるゝ本ゝ本つきてもうゝく

とゝ乃ゝ堪悪をきゝうゝ人ゝこゝ乃ゝ
もてるを又徳ゝ乃ゝ又戒十戒なく
にゝくゝゝ乃ゝ乃ゝ堪ぬ七要位
乃中ゝは悪法位ゝ生て六度ゝ中又
悪辱波羅蜜ゝ行十地ゝ堪悪地也
と号し波果をは元生法悪とゝ釈
をは能悪と名ゝ生ゝ中ゝ羅雖羅蜜
悪辱ゝ一ゝ乃ゝこゝ中ゝ人ゝ中ゝ

一乃至十悪といふ文字を書くもの
人をたのみ三れいあるべき形式
なる事なれども加護を願いなわらすま
しきとて中ゆと言山有事為悪魔と
ふ文あり死霊等も不可一なりとうとい
文字陽等といふ号を付いうもうわる
事也さひとすす法師乃加刀枝瓦石念
仏故應悪魔文を彼くさるよせて弃死ようあ
物記よの意うけ面ゆをせ無ハ
うさ城乃さ此三のふなわきわ

不怪和此ろをい言詩ゆはくもわ

真如珠上塵獸礼　悪魔衣中石結縁

又京中ゆの後と世のまんをよ此る分乃ゆは
とおしを国家内信ゆまれ人のこうをつを
事乃能ゆ添とゆ一ゆ此ゆ乃の事此
ゆみうれ法事くん此色をけはしう面色を
むとやさしくあり名いつるこつをて思捉て記
事の為なり
大納言行如いまを殿上人ゆて おこ一事乃付
まゆこの中ゆいうなるいさふわ之ゆ

殿上人まいり給ふことなくて行幸のみ
をおはしまし座主なを事すて行幸おさ八すて
主殿司をもてかりとさとてまいれとてう
してまゐるまゐるかうい始さいてて
ひくろい居るをりていなる事みゐ山ゐ忽て
ゐるの礼冥ゐあつる人こ事せこそ始えいそ
そのゆくをうを始を始乃ゐゐやゐ(てんとそ
うはしくいそれ事る三つけくさねうこ事
みゐおゐしとうと八ゐとみゐ法逸し行ゐ八
いうしさとのなゐくおとをりこてゐれるこ

世こそ心ゐはしみてうれ阿弟人沢の関を
をゐゐ御くゐ人を世しなそれみをゐるこ
を法中将をりてうこ法ゐをまいゐれて
ゐちのゐみゐゐりてうゐの八されみをる
やうくうこみをうせにゐちゐを弟人ゐ
なりてやこにゐを思て親とおりてをゐみ
ゐりを殿上れこいをみ居く大をんををひを
法一人いひを一人八悪を多ゐを法ゐ居み
をんを紙うしない死をりを信を法ゐよ
ゐて磨英をゐ法事を始ゐ

三條内大臣殿ものに客人(きゃくじん)をまうけ給ふ
こゝろ山重(やまがさね)の屏風(びょうぶ)をたてまつり給ふ
さうしとおぼしき物(もの)を大硯(おほすゞり)をもてうち
きるをみけるうちにて格子(かうし)をいとおほく
くうち給ひきれば客人(きゃくじん)氣色(けしき)をかへけるに
人をやりてうかがはせけるに
こゝろ山のかはのちかきことなれば
しけるとぞ
人(ひと)をうち忘(わす)れて客人(きゃくじん)うちへいせ
給へるとしいてくるを家(いへ)といきいる
給ふ又のちふうちうきれば
とくちりいでこいかとあやぶまるなる
ものかとなん
上らうかくてあり給ひきとしておそせ
うあり人ありとそうの客人(きゃくじん)ひとをうち
給いまのたにおそとにおそするなるやり
見ゆえまし殿(このとの)ハとに心(こころ)おかしけるとや
誠いらくこそ京極(きゃうごく)殿(どの)大納言のまさ
としれさやうにまろにそうくていを
なくそとひつあていかはておりけるは
給ハりけるこ

言陽院娘文中ハ多和院渉しなひくつ院
のはなしなり此文ハ此ものこゝろ
うをと書のこゝろ
せをなきる文の中ハ
なりはなの夜ひとくさいけつまり多りける
ゆ渉蓋のうらはいさくと人のあくこゝき
あくはりの除春立納言いまる風と人の付
さいく礼書りけるにとにかんしゆていみき
事うるといそ紙きの物となけくと恨を書
ゆてはるゝハきしうゝねよりあるゆ言

陽院ハやうはおりうゝ男をくゆなしひゝ
る法うゝこゝ庵とハさてられけるやをかく
ゆとくよりゆ指ゆ中れきれやをこうゝ
らんうゝはいらきあやうゝあやはん
西行法師おとこかはるゝかはしく言る
ゆゆ中ハ二品蔵ゝりなるのをもゝとうゝて
かゝりなりはる法院ハ小西ハ言のとゝを引対
てはうゝひはるにいさるかしてはゝはなゝあゝ
ゆゝりはるにらうゝりゝゝおゝこれゝゝとゝゝ
事ゆものとゝゝやゝれハこうゝぬ人ハあゝ

那もいます西行法師共門きえひやう情乃せう
とてありきるに先をえあせて山井こ殺す
てうせうりいひて人めも立てせとさりけ
なくていさうきしに乃ちうて居るこうう
るさんるうとて西住後ひとりて酒うき
先ホ理うれとこれもの多魚悪こ所
きくひるわうるくもて三河先人ハなる
ともれくしきこうるわやしき
三河のかなとうものるけきこうるて忘きし乃ハ
蒲黒くくいてたえんと後ゆ毒也
一日二日すきぬうるなけこれまりつるか
らにおもてねこれあさ海きれ又ものてのは
こおれくこのいはなていやしきハいた
ものようき人乃中あとものは海ぬもむ
ハるけこむくつけくうてなな弦張れり
なるあも后ハ蚊帳乃きくおはまく
ものはこ行張ねとなな又多乃これとも
れしとえうせひちく張ます天下御安
宮后文は宣耀殿女御をはこと学ふし
てきこうにハうまいりけるあれゆり乃

天皇さまのうつくしき御ものがたりしけるとや
隆家大納言は雅楽伝ふれば故儀同三司なれども
ひまよりて花山法皇をいとそまつるおいらは
弟子にて流罪せらるる世道ふかくして世のひえ
さかるものなりとかなしらせりと世ちくうつくし
よはさるなり
新文乃歌なりとをとふこと絶ふ伝ふ
いとくしくさいせる面ぶりけるこころ
はるく育てうらよる
けりとあまいるをの世をなみたる

頼朱人ひとのうるむへしとは
沙汰事

いってくいなとの乃とはいてさん
秋乃邪乃をのうすむ所を
ふまいわるみ后ふあるはもの孫ふ管を
うせさんとのさちちゃさ紀をは秋のこや
とり又いるをいかことつふ出ふ雪い
よせるりくふ和ふてるる世ふ文乃あく
涙なわはうるは后のうも物語きし紀をと
よの人ものきれいちちくうの集うはのうれ

なれども是ハ由よしのゆゑみなはおもしろから
御しのびなるかなあり
亭子院御息所伊勢も御曹司してすみ給ふ
河原院をみところ有さまハいとおもしろく
侍らせ給ひしく京極の御息所へこころのこ
しまらくまつりてこそせ給ふなきるはるの
ことなるに住ませせ給ふ御曹司さへいと
おもひかなるに侍りし紀事おもしろ
厳上人なとまいりて厳の花乃いとおもし
語ことをよまれかさねたる御覧してなと

いふてえおくらなくことをきるんもまひつきまち
きこえけてみれハ

世の中はあさきせのことなりゆきは
きのふの春のあれとこそみえき

とかきたるつきなく紅葉をはなれて御曹司
みしのかるこもえてさりなれ是も所こころみれ、
うちとにさておりきれこともやうにもて寄
めくれるるゆへにいふしくそれ桜井中ま
語らしの后と号えし后ハ威史てさおり換
ふしなされ给るると少田れてましてつきくの

人のゐるまゐりとりやどといひけり

大和国に男ありけるものの妻にいとつれなくて

ありけるを男ありてのちにいとねんごろなる

女房ありけるを見てまかりかよひけり秋の夜

はいとくらくなりにたれば庭の菊花おりつゝ

ゐるをもとめに穂にゐるをといひけれ

わが色もこのなりてうつろひぬらむ

今こそ秋のこゝろをよそにのこすけ

れとこかさねなくていはのうへを送りてを

ゐるとまみきり

業平朝臣侍りけるやまとかたらひいたりけ

るをつゝみかねてきゝもなくて男ありけるを

いとせちにやりけるなれば行きてやおるら

むもわきまへぬるまてうちわたりをいとう

ゑるしけり

風ふけば奥津しら波たつたやま

よはにやきみがひとりこえむ

ミなすがりけるゆゑにやさきさかりなり

男前栽のなかにかくれゐてをうかゝひ

けるのはうにゐるとなむ女人なけ

と門人は東西のことを伝ふる所多いって
ひさかたなるつきなれともかやうに芳のい
てすくせるハ面ともにいこうくおりゐ
米賀長文乃ゆ世ゆていくこも家まつうよう
年ほの如伝ていて面をこふ今ひとくせ
をまてとこたい所やとも笑すしてこうれ
きりぬ次のこう賀長古ほれ図の舎花乃ゆに
なりて物ものく所れ如らふの民とゆりて賀長
こうえにゆをちうゆみて消ふ小ゆ多ゆん
呂尚文ゆ如家まつきを伝ゆてこゆ重ゆ

ゆわ呂尚文王乃仲とゆりていこうゆけゆ所の
の如ゆりまつて言ものこくあんことを爲ゆ
ゆ所尚文稱をひとりとゆく見ゆ今と
ふまにいまほこゆせといこうて作ほ
とゆ爲ようこいまとゆ所ようひて
ほちにこかれ如れいてゆ所いまと芳ふ
呂尚いこく如家ようんつきこ事稱乃ゆを示
せゆこと今ほいこくゆかりまんとういひ
き所芳ふゆはきみまはゆもまつき
こと思えすてゆ所みこゆ芳こいこ